

## 教養プロジェクト

### 3年 土屋瑞輝

#### ○本

##### ・『方丈記』 鴨長明

この世の無常とはかなさを描いた鎌倉時代の随筆。前半の厄災や世俗のしがらみ部分は、現代のコロナ禍と通ずるところがあるように思えた。

##### ・『河童』 芥川龍之介

主人公が河童の世界に迷い込むといったお話。河童の世界は理解できないが引き込まれる。

##### ・『一握の砂』 石川啄木

551首が収録された歌集。歌風は、徹底的な生活派であり、ごくありふれた人間的な感覚を歌ったものが多い。印象に残った歌は“はたらけど はたらけど猶 わが生活 楽にならざり ぢつと手を見る”。

##### ・『お伽草子』 太宰治

瘤取り、浦島さん、かちかち山、舌切雀の4作品が収録された短編小説集。それぞれ馴染みのある昔ばなしがアレンジされておりとっつきやすい。

##### ・『シーシュポスの神話』 アルベール・カミュ

「不条理と生と死」について書かれている。「生きるべきか、死ぬべきか」の議論に関して、世に苦しいときの神頼み的な理論が多い中、生きる上での困難と向き合いだした結論に惹きつけられる。シーシュポスの生き様については、生きていく上での闘志を受け取ることができたと思う。

##### ・『思考は現実化する』 ナポレオン・ヒル

「引き寄せの法則」を中心に、生活していくうえでの意識について語られる。すべてが信じられるわけではないが、読むとポジティブになることができると思う。

##### ・『イワンのバカ』 トルストイ

おひとよしなイワンが悪魔たちの策略をことごとくやぶり、逆に懲らしめ成功するお話。とにかく体を使って働くことが一番であるように書かれているが、現代ではむしろ悪魔的な頭脳を使った生き方もやはり必要であると思える。

##### ・『阿Q正伝』 魯迅

阿Qを主人公を通して、辛亥革命が中国の一般社会にどのようなインパクトを与えたのか、それを考えさせる物語。

##### ・『ソクラテスの弁明』 プラトン

ソクラテスが死刑判決を受けてからのソクラテスの言動が描かれる。

##### ・『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治

ジョバンニとカムパネルラが銀河鉄道の旅をする物語。映画化やアニメ化、演劇科もされている。

## ○音楽

- ・エドワードエルガー 『愛の挨拶』

1889年 cmやドラマの挿入曲で耳にしたことのある曲。聴いている間は、世界がゆっくりになっている気がする。

- ・グノー 『トロイの娘の踊り』

1859年 歌劇「ファウスト」のバレエ音楽。オペラ的な優雅さを感じる。

- ・エリック・サティ 『3つのジムノペディ 第3番』

1888年 どこか寂しい哀愁漂う曲。サティ自身も精神的孤独な人生を歩んでいたようで、その性格が曲に表れている。

- ・ヨーゼフ・シュトラウス 『ポルカ「鍛冶屋」』

1869年 曲名からもっと男臭い曲を想像したが、意外にも軽やかで聴きやすい曲であった。

- ・ドビュッシー 『夢』

1890年 曲名の通りに儂い印象の曲である。

- ・ヨハン・パッヘルベル 『カノン』

不明 これもcmやドラマで耳にしたことのある曲である。特にどこで使われていたのか思い出せないため、その曲調だけで印象に残りやすい音楽なのだとわかる。

- ・フリードリヒヘンデル 『水上の音楽』

1715 - 1717年 全体的に朝だったり、春のような始まりを感じさせる音楽である。

- ・ルイジボッケリーニ 『メヌエット』

1771年 名前が印象的だったので選んだ。

- ・グスタフホルスト 『惑星』

1918年 今回一番気に入った曲。有名なパート部分だけは聴いたことがあったが、今回フルで聴いてみるとそのカッコよさに感動した。最初から最後まで曲全体を好きになることは、自分の好きなジャンルの曲を探しているときでもなかなかないので、良い経験だった。

- ・ワーグナー 『ワルキューレの騎行』

1856年 やる気に満ち溢れてくる曲。カッコいい。

## ○芸術

- ・『死の勝利』 ブリュッゲル

1562年頃 ペストの大流行後の死生観が表現されている。ここでは骸骨姿の死があらゆる階級の生者へと襲い掛かり、容赦なく蹂躪する様子が描かれている。当時の人々のもつ死に対する恐怖が伝わってくる。

- ・『ナポレオン1世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』 ダヴィド

1807年 ルーヴル美術館 世界史の教科書にも大きく掲載されている有名な絵画である。初めて見たときはその細かな描きこみ具合に驚いた。この絵画で写真にはない写実主義の良さが少しわかったような気がする。実物の寸法は6.21m×9.79mとなっており、想像もつ

かないほど大きい。その迫力をいつか実際に自分の目で見てみたい

・『キオス島の虐殺』 ドラクロワ

1824年 ルーヴル美術館 当時のトルコ帝国の残虐さがよく表れている。

・『ポントワーズの花の咲く菜園、春』 カミーユ・ピサロ

1877年 オルセー美術館 印象派 街中に太く大きい木が堂々と立っている様子に惹きつけられた。気に咲いている白い花が画面から浮き上がっているように迫力がある。

・『赤いチョッキの少年』 ポール・セザンヌ

1890年 重苦しい部屋、憂鬱な少年、そんな暗い画面の中で対比的に少年の着ている赤いチョッキが映えている。

・『エトワール』 エドガー・ドガ

1876年 オルセー美術館 バレエをする少女を描いた作品。ただ絵がうまいだけでなく、少女のまとうオーラの的なものを感じる作品であった。

・『システィナ礼拝堂』

バチカン宮殿にある礼拝堂。画像でみるだけでもただただ圧巻。大塚美術館にてレプリカを見たことがあるが、天井を見上げながらしばらくぼーっとなるほどだった。これも実物を観に行きたい。

・『大日如来坐像』

東寺 密教を伝え広めるために建立された東寺の講堂。東寺の中心に大日如来を安置することで、寺域を巨大な曼荼羅にレイアウトした。この仏像もかなり大きく、実際に目の前にすると少し怖かった。

・『魚の心』 歌川国芳

年代不明 魚が擬人化されて描かれており、どれも怒りに満ちたような顔をしているのがおもしろい。こういうところから、日本の漫画、アニメなどの流れを感じることができる。

・『鳥獣戯画』

12世紀 - 13世紀 東京国立博物館・京都国立博物館 日本最古の漫画と称される。うさぎもカエルもかわいらしい。現代で日本の漫画やアニメがここまで流行っているのも、この絵にみられるような遊び心が何百年も前から脈々と受け継がれてきたからなのだろう。